

氏 名：牧野 美幸

学位の種類：博士（看護学）

報告番号：甲第99号

学位記番号：博第97号

学位授与年月日：令和2年3月17日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：基礎看護技術の演習における教員の初学者へのはたらきかけ：

学生自身が“感じをつかむ”ことに焦点をあてて

Teaching Approaches to Nursing Students During the Early Stages of Nursing Skills

Acquisition in Laboratories: Making Students Aware of Their Own Feelings

論文審査員：主査 坂口 千鶴

副査 佐々木 幾美（正研究指導教員）

副査 本庄 恵子（副研究指導教員）

副査 小宮 敬子

副査 吉田 みつ子

論文審査の結果の要旨

看護実践能力において「看護援助技術を適切に実施する能力」は重要であるが、学生が臨地実習で看護技術を実施する機会が限られている現実があり（間瀬,2012,p.62）、学内における看護技術演習の授業の重要性が高まっている。その中でも本研究は、実技を学び始めて間もない学生の学びに着目し、彼らが自分の感覚に意識を向け、うまくいく感じをつかむための教員のはたらきかけに焦点をあてた研究である。教員は初学者ならではのはたらきかけをしていると思われるが、具体的にはたらきかけについては先行研究で明らかになっていない。本研究では、基礎看護技術において、看護技術の実技を学び始めて間もない学生が自らの感覚を通して“感じをつかむ”ことについて、教員は実際にどのようなはたらきかけをしているのかを明らかにすることを目的とした。

初学者に看護技術を教える学内の演習という授業は、看護実践において自らの身体の動きや感覚を駆使していくための基礎的な位置づけとして重要であり、技術を実際に行っていく中で「感じをつかむ」ということに着目した点は独創的であり、その意義は大きいと評価された。技術演習の参与観察と半構成的面接により、教員がどのような意図や願いを持って学生にはたらきかけているのか、それによって学生がどのように反応するのかを、場面としてまとめ、図を取り入れて示したことによって、わかりやすく描いた点が本研究の特徴である。研究結果から、初学者である学生に対して、教員はわざと言語を用いて自らの身体感覚をありのままに表現しているが、教員が一方向的に教えるのではなく、そこでは学生がその感覚を自分の中に探り出すために主体的に参加している様子が示された。教員と学生が同じ時間と場を共有する中で、技術を学ぶことの意義が示されたと評価する。また、教員自身が自己の実践を振り返り、言語化していくことだけでなく、学生個人の能力や経験等を理解し、その個性に応じたはたらきかけをしていく重要性を示した点も意義深い。

今日の看護技術教育においては、学内における看護技術演習がますます重要になるとされ、その質の向上に向けた創意工夫を凝らした取り組みがなされている。例えば臨床現場を想定したシミュレーションの教育もその一つであるが、その中でも教員による学生へのはたらきかけは重要である一方で、その詳細を記述している文献はほとんどないことから、本研究結果は重要な意義をもつと考える。また、看護技術教育に携わる新人看護教員にとって、どのように技術を教えていくのかは難しい課題であり、本研究の結果は新人看護教員の教育実践に対して大きく貢献するものと考えられる。さらに、看護技術教育の新たな方法論を検討していく上でも貴重な資料となり、今後、継続した研究への発展につながるものと考えられる。審査では、技や技術を教える場面は、看護学だけでなく、スポーツや芸術など他分野でも行われており、学際的な研究への発展を期待する意見が出された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。